蘇芳集

氏神様

高橋 さえ子

氏神の竹百幹の露涼し

松虫や太古の山のましら酒

古井戸があるや水引草濡れて

今さらに古井戸のことみみず鳴く

かなかなやゆつくり暮るる庭の木々

山あぢさゐ夕日の紅を弾ませて

江ノ電の風をまともに麻衣

一葉落つ

青山 丈

ぽつかりと茅の輪が夜の中になり

殿に居て空蝉を捨ててゆく

あめんぼの手のかからない散りやうや

何の日であらうと烏瓜の花

梧桐の木蔭もつたいなく入る

見に行けぬ日の噴水を遠く見る

一葉落つ大人の離れ離れかな

百日紅

冨田正吉

百日紅待つといふことなつかしや
見てゐても見てゐなくても蓮の花
字余りか切字か蓮の花ひらく
片蔭に心優しき人と居る
戸が開いて茅の輪くぐりにゆくと云ふ
向日葵のうしろへ回る男かな
はやばやと雲湧く土用太郎かな

冬支度

野路斉子

この辺り揃つて大樹木の実降る
今日は空に届く予定の藪枯らし
冬支度積んどく本に亦積んで
穂絮とぶ風の奉仕を受けながら
木犀の香にふくよかな今日の空
転んでは起きては愉し小鳥来る
眠れるなら眠つておかう夜は長し

靴音

前田陶代子

どの辻を来ても日の径緋のカンナ
水音の届きしところ薄もみぢ
滝壺の小暗く帰燕はじまりぬ
岩打つてあをめる秋の滝しぶき
瀬音はるかに仙人草の日向
靴音の疲れてをりぬ雁来紅
蓮は実に明日のことは考へず

落ち鮎

宮尾直美

働いてやうやく暮るる蝉しぐれ
夕風の立ちてそれより法師蝉
不器用を自慢の一つ心太
終戦日飽食の世の渓の水
老人になり切れなくて桃を食ぶ
ことことと小豆の煮ゆる秋の昼
落ち鮎や躍り出でたる山の星

晩夏

八木下末黒

ただならぬ雨の大暑となりにけり
うちは絵の百羽の鶴の風起す
つかの間の朝焼け雲を長崎忌
稲の香の上のあをぞら敗戦日
家に居て茶碗をあらふ敗戦日
海山の晩夏バイクを走らする
山の湯の濡縁にゐる夏の果

花掛水

吉田幸敏

月の夜の天籟に父謡ひ和す
黙契は白桃熟るるまでのこと
束の間の光芒として海月浮く
今朝秋の花掛水を田に満たす
すれちがふ漢ににほふ稲の花
約束のなき今日の日を風知草
赤き実のひとつ残れる夏坊主

蝉

小川美知子

干魚に塩味の濃き日のさかり
七月の木槿は風を待つかたち
手が眼鏡さがしてをりぬ朝の蝉
その次にみんみん蝉が鳴きやみし
何も起こらぬ新涼の卓と椅子
雲を見てつくつくぼふし聞き分けて
ベーグルのジャムのはみ出す秋暑かな

こゑのかなた

木内憲子

夜蝉なく思ひ出すには遠きこと
電車遠くて八月の蝉の声
遠くよりひらと人くる処暑の庭
夕風を視野に均して鬼やんま
何がなしかなしきことも立秋忌
秋蝉のこゑのかなたに母ゐます
新涼のドラマのこゑを絞りけり